

超高齢化社会における老人自己意識形成の考察

辻 正 二

1. はじめに

筆者はここ数年「老人」形成のメカニズムをラベリング差別論の視点から検討してきた。¹⁾この視点は、人が老人になるのは、その人の身体的・精神的な老化に起因するとみるのではなく、むしろ社会が老人をつくるということを強調する。我々の社会は、定年制や種々の老人制度などのような、ある年齢になると人々を「老人」にさせるメカニズムを装備している。もちろん、このメカニズムは、社会のマクロなメカニズムによってのみ完成するわけではない。人との相互作用が係わっている。すなわち、高齢になった人々が自分自身を「老人」と抱くようになるには、周囲の人々との相互作用が不可欠であり、老人化が完了するにはそうした人々や社会からの「老人」という解釈・規定・処遇を受けて、自分を「老人」と思うようになるのである。²⁾そして、この「老い」を促進するメカニズムは、普遍的に同じ様態をとるのではない。老人化を促進する要因は地域のもつ文化構造によって違っていると考えられる。筆者は、この仮説に関してこれまで老

* 本研究は1997年山口大学経済学部学術振興費の助成を受けてなされた「過疎地における高齢者処遇過程の研究」と題する研究の成果の一部である。

1) 拙稿「ラベリング差別論序説」(『宮崎大学教育学部紀要』1983年3月, 第58号71—85頁)

2) ここでは老人化とは「高齢者への『老い』を強いる抑圧構造, つまり社会的な老人形成過程」としておきたい。拙稿「老人化に関する社会学的一考察—老人差別の研究—」(『宮崎大学教育学部紀要』1990年3月, 第67号, 3頁)

人化の地域比較、老人化の世代間比較、若者の老人差別意識、老人語の分析、老人自己意識類型の分析等を実際行ってきた。³⁾前回の論考では、産業都市と地方都市の地域比較の中から老人自己成就意識の形成を探った。⁴⁾

本稿では、産業都市で考察した老人化メカニズムの考察を、過疎地・超高齢化した地域において検討する。その際の問題意識は、次のようなものである。つまり、高齢化の進んだ過疎の島において「老人」とは、どのようにみられているのであろうか。老人がマジョリティを形成している社会では他のマイノリティな状況にある地域に比べて「古い」をそれほど意識せず、「古い」を昇華するメカニズムが働いているのであろうか。それとも「古い」をより一層意識させ、「古い」への消極的な反応が強く働いているのであろうか。それを以下のような視点から追ってみたい。(1)超高齢化社会で老人自己成就意識がどのような形成のされ方をするのか。(2)超高齢化社会のなかで老人意識がどのような特徴を持つのか。(3)高齢者の自我像と老人意識がどのような関連を持つのか。つまり、本稿の目的は、超高齢化現象が高齢者をして自分自身を老人とみるようになる老人化過程（自己レッテル）を分析することにあるが、老人自己成就意識の分析、老人意識類型の構成と分析、それらを自我像との関連で分析することを通して老人の自己レッテル化の側面を考察することにある。ここで使用するデータは、昨年、山口県大島郡東和町と橋町を対象に実施した調査である。ただし、今回の調査において得たデータは、老人クラブの加入者を調査対象者として

3) 拙稿「老人化に関する社会学的考察—老人差別の研究—」(『宮崎大学教育学部紀要』1990年3月, 第67号1—21頁), 拙稿「老人化処遇過程の社会学的研究—大学生の老人差別意識の分析による—」(『山口大学教養部紀要』1992年, 39—58), 拙稿「エイジングと社会」(『いのちと環境』「山口大学教養部総合コース講義録」) 1993, 第7号, 79—91頁), 拙稿「老人意識とラベリング: 自己ラベリングの視点から—」(『山口大学教養部紀要』1993年, 第27号, 67—86), 拙稿「産業都市における老人意識形成の考察」(『山口経済学雑誌』1997年, 45巻4号, 35—66頁)

4) 北九州市の地域構造の分析については、拙稿「産業空洞型インナーシティにおける高齢者問題の一考察」(『社会分析』1997年3月, Vol. 24, 29—47頁) に詳しい。

選んでいるので、年齢も60歳以上の高齢者になっている。⁵⁾

ところで、調査地である山口県大島郡東和町と橘町の位置する周防大島は、瀬戸内海に浮かぶ島のなかで3番目に大きい島で、島内には4つの自治体がある。昭和30年まで7万近くあった大島の人口はいまでは2万5千人に減っている。東和町と橘町は、大島で東端部に位置し、人口がそれぞれ5,786人、6,286人である。昭和30年の人口が東和町17,128人、橘町14,210であるから、いかに激しい人口減少をしたかがわかる。東和町の方は平成9年4月の高齢化率が48%を示し、文字通り全国一の超高齢化社会である。他方の橘町も40.3%で、全国7位の高齢化率を示す地域である。両地域の主な産業は、農業と漁業で、農業で盛んなのは「山口ミカン」の主産地になっているミカン栽培である。調査は、東和町の伊保田、外入の2集落、橘町の安高、三つ松の2集落を対象に実施した。⁶⁾

今回調査した東和町と橘町の対象者は、老人クラブの会員である。したがって当地に高齢者の全てを対象としたものではない。しかし、この地域の老人クラブの加入率は山口県内のなかでも最も高く、ここでのテーマに支障を出すほどのものではないと考えられる。⁷⁾ただ、調査対象者が老人クラブであるということで、一定の制約をもっていることは付言しておかなければならない。⁸⁾

5) 大島郡の老人クラブの加入率は、平成9年3月時点でみると58.1%である。この値は、山口県平均の加入率に29%に比べると、一番高い値なのである。そのときの加入率は、東和町が54.7%、橘町が71.8%となっている。

6) 外入地区は、東和町の中では外浦側に面し、人口数が平成9年7月時点で535人を数える。旧村時代の白木村の村役場のあった地域である。伊保田地区は、内浦側に面して、人口は779人である。雨振、伊保田、小伊保田の3小部落に分かれる。東和町でのなかでは東端部に近い位置にある。外入は、東和町の中では南西部に位置し、漁業と農業の方が盛んな地域である。伊保田は、松山に行く高速艇の発着所も置かれており、港湾施設ももつほどの漁業の盛んな地域である。橘町の方では安高地区と三つ松地区は調査対象地となっている。安高は、世帯数144世帯、人口324人のミカン栽培の盛んな農業集落であり、三つ松は、世帯数が271世帯、人口が565人の漁村集落である。

ここでは日本一高齢化の進んだ東和町を超高齢化社会と捉え、それを比較する形で橘町の高齢者を分析する。

2. 老人自己成就意識の分析

最初に、自分自身が「老人になった」と承認する意識項目から始めたい。ここではこの「老人になった」という項目を老人自己成就意識と呼んでおきたい。

-
- 7) 東和町の老人クラブは、平成9年4月時点で会員数1,718人で、女性会員が62.5%である。伊保田の老人クラブは、和楽会といい、第1, 第2, 第3の和楽会に分かれる。平成9年4月の会員数は166名で、女性会員数は60%を占める。外入の老人クラブは、百歳会といい、第1から第4の百歳会に分かれ、会員数は241名。そのうち女性会員は全体の63%である。橘町の老人クラブは、同年6月の調査では、会員総数2,215人、内1,415人(63.8%)が女性である。安高は千歳会といい131人が会員、内女性が83人である。真宮の老人クラブは真光クラブといい、会員は71人、内女性44人、三つ松の老人クラブは、白扇クラブといい、東、中、西の3つに分かれている。会員は229人、その内女性の会員は148人である。
- 8) 老人クラブを対象としたことによって今回の調査には、結果的にデータの分布に幾つか特異な内容が含まれた。一つは、橘町のデータに関しては、一般的な人口構成よりも男性データが多かったことである。橘町のデータは、男性が全体の55.6%を占め、女性よりも多いのである。それから、伊保田の場合、他の3集落に比べて「80歳以上」の高齢者が約3割近くを占め、75歳以上の後期高齢者層の占める比率が6割となっている。外入の場合は、75歳以上の高齢者が4割強となっていることからして、東和町のデータは、橘町に比べて高年齢層が多くなっている。橘町の方でみると「安高」地区の70~75歳層が全体の約半数となっているし、三つ松も4割となっている。それだけ東和町の場合、老人クラブとして活動している人が高齢ということであろう。これも超高齢化社会である地域の老人クラブの特色と理解すべきなのだと解される。

今回の調査で東和町と橘町のデータのうち属性上の有意さが確認できたのは年齢と世帯収入であった。つまり、東和町データには75歳以上の高齢者が42.1%みられるのに対して、橘町は32.7%であった。それから、一ヶ月の世帯収入は、橘町の方が高い。30万円以上の世帯収入を挙げた高齢者が橘町では20.7%、東和町では12.1%であった。逆に5万円未満の世帯収入は東和町では9.3%、橘町では3.2%であった。

まず、表—1は、「あなたは『老人になった』と思うか」という設問を地域別・性別・年齢別にみたものである。これをみると東和町の高齢者で「思う」と答えたのは、76.3%で、「思う」と答えた人が「思わない」と答えたものより多かった。これを性別でみると、「思う」の回答は、男性より女性の方に10%ほど多く、年齢別でみると、「思う」という回答は、年齢が上昇するとともに増加する。しかも、男女別に5歳階層別の推移をみると、80歳以上の年代を除けば加齢と共に「思う」という割合は、増加する傾向を示す。他方、橋町の方は、「思う」という回答が67.9%で、加齢とともにはっきりと「思う」という割合が上昇する。つまり、老人自己成就意識が高齢者の間で加齢とともに意識的に内面化する形で進行することは間違いなさそうである。では、性別ではどうだろうか。東和町と同様に橋町のデータでも女性の方の比率が高い。東和町では男女の差が大きく、女性で顕著な比率(81.1%)を示す。さらに年齢別に男女差をみてみると、橋町ではすべての年齢層で男性よりも女性の方において老人自己成就意識の比率が高い。つまり、橋町では女性の方が男性に比べて「老人になった」という意識を早く身につけ、後期高齢層ではほぼ9割の女性にこの意識は拡大する。これに比べると、東和町の場合は、「老人になった」という意識が男女で違ったパターンを示すのである。つまり、老人自己成就意識を「思う」と答えた比率が、男性の場合、65～69歳で47.4%、70～74歳で57.7%となっており、それが後期高齢期の75～79歳層となると、一挙に増加し、9割強を数えるまで増加する。これに対して女性の場合、65～69歳ではすでに「思う」と答えるものが57.9%みられ、70～74歳では87.5%、75～79歳では91.1%と、70歳以上の年代で30%の伸びを示し、それ以後少しか増加しない。

つまり、以上からみると老人自己成就意識の形成は、東和町では男女とも65歳以上の年齢で半数近くが老人自己意識を形成している。そして、男性に比べ女性で早めに始まる傾向を示す。超高齢社会の高齢者の老人自己成就意識の形成は、70歳以上で惹起し、男性の方は75歳を越えると、一挙

表一 性別・性年齢別にみた老人自己成就意識

		東和町				橘町				大島郡			
		実数	思う	思わない	不明	実数	思う	思わない	不明	実数	思う	思わない	不明
全 体		215	76.3	20.9	2.8	187	67.9	31.0	1.1	402	72.4	25.6	2.0
性 別*	男性	92	70.7	27.2	2.2	104	67.3	31.7	1.0	196	68.9	29.6	1.5
	女性	122	81.1	16.4	2.5	82	68.3	30.5	1.2	204	76.0	22.1	2.0
年 齢 別**	60～64歳	6	16.7	83.3	—	3	—	100	—	9	11.1	88.9	—
	65～69歳	38	52.6	47.4	—	39	30.8	66.7	2.6	77	41.6	57.1	1.3
	70～74歳	58	74.1	25.9	—	81	75.3	24.7	—	139	74.8	25.2	—
	75～79歳	73	91.8	4.1	4.1	42	83.3	14.3	2.4	115	88.7	7.8	3.5
	80歳以上	39	84.6	0.3	5.1	19	84.2	15.8	—	58	84.5	12.1	3.4
60～64 歳	男性	3	33.3	66.7	—	2	—	100	—	5	20.0	80.0	—
	女性	3	—	100	—	1	—	100	—	4	—	100	—
65～69 歳	男性	19	47.4	52.6	—	21	38.1	61.9	5.6	40	42.5	57.5	—
	女性	19	57.9	42.1	—	18	22.2	72.2	—	37	40.5	56.8	2.7
70～74 歳	男性	26	57.7	42.3	—	46	71.7	28.3	—	72	66.7	33.3	—
	女性	32	87.5	12.5	—	35	80.0	20.0	4.2	67	83.6	16.4	—
75～79 歳	男性	28	92.9	3.6	3.6	24	83.3	12.5	—	52	88.5	7.7	3.8
	女性	45	91.1	4.4	4.4	18	83.3	16.7	—	63	88.9	7.9	3.2
80歳 以上	男性	16	87.5	6.3	6.3	10	80.0	20.0	—	26	84.6	11.5	3.8
	女性	23	82.6	13.0	4.3	9	88.9	11.1	—	32	84.4	12.5	3.1

(備考) 東和町* $\chi^2=3.65$ df=1, ** $\chi^2=44.06$ df=4, 橘町* $\chi^2=0.03$ df=1,
** $\chi^2=40.24$ df=4, 大島郡* $\chi^2=2.90$ df=1, ** $\chi^2=82.41$ df=4

に増加する傾向を示すのである。

そこで老人自己成就意識(つまり「老人になった」という意識)の客観的側面、主観的側面を調べてみたい。

表-2 「老人になった」意識の客観的基盤と主観的基盤

客観的要因	相関係数		主観的要因	相関係数		
	東和町	橘町		東和町	橘町	
性別	-0.1322	-0.0126	住みやすさ	0.0116	-0.0217	
年齢別	-0.4065**	-0.3915**	老後の不安感	0.1841**	0.0683	
居住年数	-0.1553*	-0.1050	敬老精神の有無	0.0200	0.0060	
同居形態	-0.0714	0.0198	老後開始年齢	0.0889	0.1919**	
家族員数	0.1857**	0.0087	いやな思い	0.0930	0.1916**	
出身地	-0.0510	-0.0622	呼ばれて気になる	-0.0554	-0.1518**	
職業	-0.1768*	0.0205	棄老感覚	-0.0779	-0.1283	
学歴	0.1139	0.1135	老人排除認知	-0.0091	0.0918	
世帯収入	0.2250**	0.1588*	社会的地位の喪失	-0.0029	-0.0431	
親しい人の数	0.0384	0.1738*	家族連帯の喪失	0.0267	-0.0152	
親類数	-0.0442	0.1006	バイオメディカルな地位喪失	-0.0623	0.0940	
近所の人	0.0458	0.1531*	経済的自立の喪失	0.0793	-0.0270	
友人	0.1040	0.1702*	老人ホームへの入居意識	0.1621*	0.0331	
集団加入	0.0458	-0.0790	自我像	生きがい感	-0.1637*	-0.1361
相談相手の有無	0.0952	-0.1206		生活満足度	-0.0504	-0.1476
健康状態	-0.0158	0.0683		孤独ではない	-0.1005	-0.1014
(備考) 数値は相関係数で、(**)は1%で有意、(*)印は5%で有意を示す。				家族に誇りをもつ	-0.1707*	-0.2078**
				自己存在満足度	-0.1317	-0.0418
				自己能力発揮度	-0.1350	-0.1306
				社会的不可欠性	-0.1860**	-0.0795
			社会的貢献能力	-0.2083**	-0.1042	
			ボランティア活動参加意思	-0.1134	-0.0813	

(1) 老人自己成就意識の客観的基盤

東和町で老人自己成就意識を促進するものは「何か」、女性の方に老人自己成就意識を強化するものは「何か」、そしてこれはどのような基盤を背景にして形成されるのであろうかをみてみたい。まず、この「老人になった」という意識がどのような基盤に支えられているかを、今回調査した項目から探りたい。具体的には16項目の客観的屬性との間での相関度から探るこ

とになる。表—2は、その相関係数を示したものである。16項目のうちでは年齢、職業、収入、居住年数、家族員数の5つの設問との間に1%~5%の有意の相関度が見られた。高い順に配置すると、もっとも相関係数の高いのは年齢(-0.4065)である。以下世帯収入(0.2250)、家族員数(0.1857)、就労の有無(-0.1768)、居住年数(-0.1553)という順である。つまり、この相関関係の意味するものを具体的に表記すると、東和町の場合、この老人自己成就意識の形成には、加齢(年齢)属性、職業属性、経済的属性(収入)、家族員数属性、居住年数属性が関係しているということである。つまり、東和町でみると「老人になった」という老人自己成就意識形成の客観的基盤は、加齢、世帯収入、家族員数の3要因(1%で有意)が強く働いていることがわかる。そこで、この相関関係の意味するものを具体的に表記すると、東和町の場合、老人自己成就意識は、以下のよう傾向を持つことを示している。

- ①年齢別にみると、この老人自己成就意識は、若い年代の人よりも年長の年代になるほど、この意識を持つ割合が多くなる傾向を示す。
- ②世帯収入でみると、世帯収入の多い人に比べて、世帯収入の少ない人ほど、この意識を持つ傾向がみられる。
- ③家族員数でみると、家族員数を多く持つ人に比べて、家族員数の少ない人ほど、この意識を持つ傾向を示す。
- ④職業別では、職業を持っている人と比べて、職業を持たない人ほど、この老人自己成就意識を持つ傾向がみられる。
- ⑤居住年数でみると、居住年数の短い人に比べて、居住年数の長い人ほど、この意識を持つ傾向がみられる。

これに対して橘町で有意な相関関係を示したのは、年齢別、親しい人の数、友人数、世帯収入、近隣数の5項目との間であった。東和町の方が年齢別や居住年数、家族員数、職業の有無、そして世帯収入が「老人になった」という老人自己成就意識に関係するのに対して、橘町の場合、老人自己成就意識がインフォーマルな集団数と関連していることがわかる。世帯

収入に関しては東和町も橘町も相関度を示しているが、東和町の方が相関度が高い。以上からみると、東和町の高齢者の方が家族の規模や職業や収入など生活そのものに直結したものと相関しているの、生活構造型の自己成就意識パターンを示しているのに対して、橘町は親しい人の総数、近隣数、友人数といったインフォーマルなネットワークに老人自己成就意識が相関しているわけで、その点では人間関係型の自己成就パターンをとっているということができそうである。

ところで、いま一つ別の角度で東和町の高齢者の特徴を示してみよう。

表一3は、性別、年齢別、家族員数別、居住年数別、就労状況別、学歴別、世帯収入別について相関マトリックスを求めたもので、加えて橘町についても同様のマトリックスを求めたものである。これをみると東和町と橘町の違いがわかる。表からは、東和町で有意な相関を示すのは、家族員数と世帯収入 (0.4590)、性別と就労状態 (0.3102)、性別と世帯収入 (一

表一3 属性別の相関マトリックス

	単相関	性別	年齢別	家族員数	居住年数	就労状態	学歴	世帯収入
東和町	性別	1.0000						
	年齢別	0.0745	1.0000					
	家族員数	-0.1844**	-0.0660	1.0000				
	居住年数	0.1173	0.2080**	-0.0213	1.0000			
	就労状態	0.3102**	0.1503*	-0.1319	-0.1059	1.0000		
	学歴	-0.1043	-0.1426*	0.0450	-0.1376*	0.0896	1.0000	
	世帯収入	-0.2610**	-0.2211**	0.4590**	-0.0953	-0.1716*	0.2683**	1.0000
橘町	性別	1.0000						
	年齢別	0.0069	1.0000					
	家族員数	-0.0374	-0.0819	1.0000				
	居住年数	-0.0445	0.1913**	0.0610	1.0000			
	就労状態	0.1082	0.1711*	-0.1096	-0.2972**	1.0000		
	学歴	0.0111	-0.0164	-0.0479	-0.0295	-0.0724	1.0000	
	世帯収入	-0.1460	-0.2583**	0.3870**	0.0289	-0.1917*	0.2976**	1.0000

0.2610), 世帯収入と年齢別 (-0.2211), 年齢別と居住年数 (0.2080), 家族員数と性別 (-0.1844), 就労状況と世帯収入 (-0.1716), 就労状況別と年齢 (0.1503), 年齢別と学歴 (-0.1426), 学歴と居住年数 (-0.1376) の10箇所においてである。その内、一番高い相関を示しているのは家族員数と世帯収入である。そして、相関数を見てみると、世帯収入と年齢とが共に5つの要因と相関している。世帯収入の方が相関係数全体が高く、年齢より世帯収入の方が東和町では作用していることがわかる。以下性別と就労状況と学歴の3つが相関数を3つ数える。そして一番少ないのが家族員数と居住年数である。家族員数と居住年数の二つは2つの相関数しか持たない。

東和町の高齢者において、二つの相関群を見いだすことができる。一つの相関群は、①世帯収入の低さが、家族員の少なさ、学歴の低さ、年齢のより高いこと、無職であること、②年齢の高いことが世帯収入の低さ、居住年数の長いこと、無職であること、学歴の低さと、③居住年数の多さが、年齢の高年齢と学歴の低さと結びつく相関群であり、いまひとつの相関群は、①男性が有職であること、家族員数の多いこと、世帯収入の高いこと、②有職であることが、男性、若い年齢であること、世帯収入の多さ、③学歴の高さが年齢の若さ、居住年数の短さ、そして世帯収入の多さと、④家族員数の多さが、世帯収入の多さや男性と結びつく相関群である。前者の相関群が年長世代と世帯収入の低さの連関を示しているとすれば、後者は若さと就労と高学歴と世帯収入の高さの連関を示している。

これに対して橋町では家族員数と世帯収入 (0.3670), 居住年数と就労状態 (-0.2972), 世帯収入と年齢別 (-0.2583), 世帯収入と就労状態 (-0.1917), 居住年数と年齢別 (0.1913), 就労状態と年齢別 (0.1711) の6箇所において有意な相関を示している。そして、橋町においても相関関係の一番高いのは、家族員数と世帯収入との間である。ここでも世帯収入の相関数が4つと一番多くみられる。以下3つの相関数が就労状態、2つが居住年数、年齢別、1つが学歴と家族員数、性別は皆無となっている。橋

町では性別と学歴が他の属性との間でほとんど相関が見られなかった。

以上から、先に挙げた東和町の方で老人自己成就意識を「抑止」し、また女性において早期に老人自己成就意識を促進する「何か」が家族員と世帯収入と職業と学歴という要因に大きく関係していることが了解できる。

表-2の中からいまひとつ触れておかなければならないことがある。それは、東和町と橘町を比較して気づくのであるが、両地域にはインフォーマルな人間関係に顕著な差が確認できることである。まず、東和町でみると、「老人になったな」という老人自己成就意識がインフォーマルな人間関係と相関するものは、一つもない。これに対して橘町ではインフォーマルな面でこの老人自己成就意識が友人数、近隣数、親しい人の総数の三つの間で相関関係を示している。そして、フォーマルな社会関係量では有意な相関は確認できない。さらに、両地域とも親類数に関しては有意な相関はみられない。それ故、この両地域のインフォーマルな面での特徴は橘町が友人数と近隣数にウエイトを置いているのに対して、東和町は、老人自己成就意識形成にインフォーマルな関係要因が全く働いていないのである。

(2) 老人自己成就意識の主観的意識構造

これに対して、この「老人になったな」という意識の主観的基盤はどうであろうか。表-2には、住みやすさ、老後の不安感、敬老精神、老人年齢、「老人と呼ばれて気になる」、棄老感覚、老人排除認知、老後開始規定要因、老人自我像、老人ホームへの入居意識、ボランティア参加意思など22項目の主観的要因を示している。これらは、住環境への評価、老後観・老人意識、自我像、社会参加意思（ボランティアへの）からなる。そして、老人自己成就意識との間で相関係数を求めたものである。東和町で老人自己成就意識に関して有意の相関関係を示したのは、老後の不安感、老人ホームの入居意識、自我像項目中の生きがい感、家族に誇りをもつ、社会的不可欠性、社会的貢献能力の6項目である。いま、相関係数の高いものから拾うと、社会的貢献能力（ -0.2083 ）、社会的不可欠性（ -0.1860 ）、老

後の不安感 (0.1841), 家族に誇りをもつ (-0.1707), 生きがい感 (-0.1637), 老人ホームへの入居意識 (0.1621) の順となっている。これらの相関関係の意味内容を説明すれば、以下のようなになる。

- ①自分が社会的に貢献できていると「思う」人に比べて、貢献できると「思わない」人ほど、この意識を持つ傾向がある。
- ②自分を社会的に不可欠な存在と思う人に比べて、社会的に不可欠な存在だと「思わない」人ほど、この意識を持つ傾向がある。
- ③老後に不安感をもつ人は、「もたない」という人に比べて、この意識を持つ傾向がある。
- ④家族に誇りを持つと答えた人に比べて、家族に誇りを「もたない」と答えた人ほど、この意識をもつ傾向がある。
- ⑤自分が生きがいを持っていると「思う」人に比べて、生きがいを持っていると「思わない」人ほど、この意識を持つ傾向がある。
- ⑥老人ホームへの入居意識を持つ人は、老人ホームに入居意識を持たない人に比べて、この意識を持つ傾向がある。

これら8つの命題群のうち①, ②, ④, ⑤は、いずれも自我像項目である。しかも、調査で使用了8つの自我像のうちで、ある要因に集中しているのである。ところで、ここでの8つの項目は、「生きがい感」と「生活満足度」の双方が「生活要因」として、「孤独ではない」と「家族に誇りをもつ」の双方は「家族要因」として、「自己存在満足度」と「自己能力発揮度」の双方が「自己要因」として、「社会的不可欠性」と「社会的貢献能力」の双方が「社会要因」として位置づけられ、その全体として自我像を構成するものと考案されている。東和町で有意の相関を示したのは、「生活要因」のうちの「生きがい感」と「家族要因」の「家族に誇り」という項目、そして「社会要因」の「社会的貢献能力」と「社会的不可欠性」の4つである。①, ②, ④, ⑤は、社会への貢献, 社会に不可欠, 家族の誇り, 生き

がい感を表わす項目であって、主体的な高齢者像を表明した項目である。この他に有意の相関を示したのは、「老後不安感」という項目と老人ホームへの入居意識という項目であった。この事実からも、東和町において有能性が老人自己成就意識形成に関連していることが確認できる。

ところで、老人自己成就意識と相関する主観的要因を先ほどと同様に、橘町についてしてみると、橘町では「老後開始年齢」、「呼ばれていやな思い」、「呼ばれて気になる」、「家族に誇り」の間に有意の相関が見られる。そのうち東和町と同じものは「家族に誇り」（つまり④）だけである。主観的要因に関して相関関係を示す項目は、両地域でかなり違っている。橘町のデータでは「老後開始年齢」、「いやな思い」、「呼ばれて気になる」といった老人自己成就意識に近接した項目が相関を示しているのに対して、東和町の方は自己像や老後の不安といったものが相関している。

東和町の老人自己成就意識には社会への貢献能力、不可欠さ、自分という存在に自信をを抱くということに関係しているということを示している。東和町では老人自己成就意識は、住環境の評価や老後観などとは相関せず、社会への貢献能力、自分の存在や自分の能力発揮できるという自信に関係し、こうした意識を持たないこと、つまり消極的な自我像の持ち主に多くなることを示している。無能力の承認が老人自己成就意識形成と結びついていることが分かるのである。

(3) 老人と呼ばれて気になる主観構造

ところで、老人自己成就意識に関して、東和町では相関度を示してはいないが、橘町の方では相関度を示す「老人と呼ばれて気になる」という項目は、どのような主観構造の上に成り立っているのであろうか。これについて、表—3と同じように客観的要因、主観的要因に関して相関係数を調べた。これが以下の表—4である。

表—4をみると、「老人と呼ばれて気になる」という意識と有意な相関を示す項目群は、結局少ないことが分かる。まず、東和町でみると、客観的

要因では同居形態 (-0.1446) の一つとしか有意の相関が確認できない。これに対して主観的要因の方では老人として扱われて「いやな思い」(0.2844), 「敬老精神の有無」(0.1633), 「生きがい感」(0.1539), 「社会的地位の喪失」(0.1403), 「住みやすさ」(0.1471) の5つの項目との間で有意の相関がみられる。これに比べると, 橘町ではやや少なくなり, この「気になる」という項目と相関を示したのは, 客観的要因では「学歴」(-

表-4 「老人と呼ばれて気になる」意識の客観的基盤と主観的基盤

客観的要因	相関係数		主観的要因	相関係数		
	東和町	橘町		東和町	橘町	
性別	-0.0304	-0.0956	住みやすさ	0.1471*	-0.0308	
年齢別	-0.1055	-0.0472	老後の不安感	-0.0284	0.0030	
居住年数	-0.0485	-0.0080	敬老の精神の有無	0.1633*	-0.1698*	
同居形態	-0.1446*	-0.0051	老人開始年齢	-0.0256	-0.0047	
家族員数	0.0371	0.0643	老人になったな	0.0426	0.0046	
出身地	-0.0729	-0.0389	いやな思い	0.2844**	0.2405**	
職業	-0.0825	-0.0436	棄老感覚	0.0372	-0.0462	
学歴	0.0159	-0.1752*	老人排除認知	0.0156	0.0372	
世帯収入	0.0968	-0.0092	社会的地位の喪失	0.1403*	0.0490	
親しい人の数	0.0211	0.0253	家族連帯の喪失	-0.0865	0.0167	
親類数	0.0319	0.0699	バイオメディカル地位喪失	-0.1031	-0.0352	
近所の人数	-0.0389	-0.0088	経済的自立の喪失	0.0787	-0.0356	
友人数	0.0391	0.0022	老人ホームへの入居意識	0.0411	-0.0651	
集団加入数	0.0244	-0.0109	自我像	生きがい感	0.1539*	-0.0152
相談相手の有無	0.0428	-0.0629		生活満足度	0.1030	0.0212
健康状態	0.0275	0.0016		孤独ではない	0.0303	-0.0353
(備考) 数値は相関係数で、(**)は1%で有意、(*)印は5%で有意を示す。				家族に誇りをもつ	0.1114	0.0274
				自己存在満足度	0.1171	0.0236
				自己能力発揮度	0.0842	-0.0027
				社会的不可欠性	0.0612	0.1167
			社会的貢献能力	0.1051	0.1255	
			ボランティア活動参加意思	-0.0773	0.2754**	

0.1752) だけであり、主観的要因では、「ボランティア参加意思」(0.2754)、「いやな思い」(0.2405)、「敬老精神の有無」(-0.1698)の3つである。つまり、東和町で別居しているほど老人と呼ばれて「気になる」傾向を示すことが分かる。以下「老人扱いされていやな思い」を経験した人ほど、「敬老精神」があると答えた人ほど、「生きがい感」を持っている人ほど、「住みやすい」と答えた人ほど、老後開始が「社会的地位の喪失」にあると答えた人ほど、「老人と呼ばれて気になる」傾向を示しているのである。他方の橘町の方では、学歴の高い人ほど「老人と呼ばれて気になる」傾向を示している。主観的な側面では「ボランティア参加意思」を持たない人ほど、また「敬老精神」が無いと答えた人ほど、呼ばれて「気になる」傾向を示す。「いやな思い」という項目に関しては、東和町も橘町も同じ傾向がみられ、東和町の方に相関度がやや高くなっている。これに対して「敬老精神の有無」の認知は、東和町と橘町とで逆転している。東和町では「敬老精神」が「ある」と答えた人ほど「老人と呼ばれて気になる」傾向を示すのに、橘町では「敬老精神」が「ない」と答えた人ほど、「老人と呼ばれて気になる」傾向を示している。超高齢化の東和町の高齢者の場合、「呼ばれて気になる」高齢者が「生きがい感」を持ったり、「住みやすい」と答えるような、地域に対して肯定的に受け止める人たちからでているのに対して、橘町では「敬老精神」が「ない」と答えているような、否定的な受け止めをしている高齢者からでているところが興味深いところである。

3. 老人意識類型の分析

以上はラベリングを受けた人が老人意識をもつようになる側面をみたものであるが、ラベリング状況は、現実には他者との相互作用状況で当然生起する。そこで、自己認知（自己承認）と他者規定の双方が作用している中で、老人意識形成がどうなっているかという側面もみておかなければならない。

(1) 老人意識類型の構成

われわれは、ここで相互作用過程において「老人」というラベリングが作用するという前提にたって、老人意識を今回調査した項目から構成してみよう。

そこで、これまでみてきた設問である「老人と呼ばれて気になる」という項目と「老人になったな」という項目を使って、新たに老人意識類型を構成してみたい。「老人と呼ばれて気になる」という項目は、他者から老人だと呼ばれ、そのことが気になるということ、つまり他者のラベリングとそれを気にする自己についての設問である。いわば対他存在性とラベリングを気にする自己の存在を捉えた項目である。これに対して「老人になったな」という項目は、生活世界で自分自身を老人になったと確認しているかどうかを聞いた設問である。それぞれについて承認と不承認の回答肢があるので、老人意識類型は4つのタイプが可能となる。

まず、第Iのタイプは、人から「老人と呼ばれ」ても「気にならない」と答え、「老人になったと思うか」という設問では老人になったと「思う」と答えたタイプである。ここでは「老人自認型」と呼んでおきたい。

第IIのタイプは、「老人と呼ばれる」と「気になる」が、自分自身「老人になった」と「思っている」タイプである。ここでは「老人自意識型」と呼んでおきたい。

第IIIのタイプは、「老人と呼ばれる」と「気になる」が、「老人になった」とも「思わない」タイプで、ここでは「老人否定型」と呼んでおきたい。

最後の第IVのタイプは、「老人と呼ばれて」も「気にならない」し、「老人になった」とも「思わない」タイプである。ここでは「老人自律型」と呼んでおきたい。

東和町では、「老人自認型」が一番多く、全体の47.9%がこのタイプであり、次いで多いのが「老人自意識型」で、このタイプは全体の15.8%である。「老人否定型」は、全体の11.2%しかみられず、「老人自律型」は、全体の4.7%しかみられなかった。なお、2割が「不明」となっているのは、

表-5 地域別・年齢別にみた老人意識類型

	東和町						橘町					
	実数	老人自認型	老人自意識型	老人否定型	老人自律型	不明	実数	老人自認型	老人自意識型	老人否定型	老人自律型	不明
全体	215	47.9	15.8	11.2	4.7	20.5	187	43.9	12.8	14.4	8.6	22.1
男性*	92	42.4	17.4	15.2	3.3	21.7	104	44.2	10.6	15.4	7.7	18.3
女性	122	52.5	14.8	8.2	5.7	18.9	82	42.7	15.9	13.4	9.8	—
60～64歳	6	—	—	16.7	33.3	50.0	3	—	—	66.7	33.3	25.6
65～69歳**	38	28.9	10.5	26.3	13.2	21.1	39	20.5	5.1	28.2	20.5	28.4
70～74歳	58	48.3	10.3	15.5	3.4	22.4	81	39.5	16.0	9.9	6.2	9.5
75～79歳	73	60.3	20.5	2.7	—	16.4	42	61.9	16.7	7.1	4.8	—
80歳以上	39	51.3	23.1	5.1	2.6	17.9	19	73.7	10.5	15.8	—	—

(備考) 東和町* $\chi^2=4.30$ df=3, ** $\chi^2=55.46$ df=12, 橘町* $\chi^2=1.23$ df=3, ** $\chi^2=37.64$ df=12

「老人と呼ばれて気になる」という設問には「どちらでもない」という回答肢があり、それが東和町の老人意識類型において17.7%も「不明」がみられた理由である。

(2) 老人意識類型とその諸相の分析

最初に、老人意識類型の各類型ごとの特徴を素描しておこう。「老人自認型」は、65～69歳では28.9%しかみられないが、75～79歳以上では60.3%になり、年長者ほど多くなる傾向を示している。そしてこの類型は、60歳代まではそれほど多くない(28.9%)が、70歳を越えると3割から4割を占めるようになる。「老人自意識型」は、60歳代では5%に留まるが、70～74歳になると、14%と、3倍近くに増加し、75歳以上ではやや減少する。つまり、70～74歳層に支持層が多い。これに対して「老人否定型」は、65～69歳の年齢層に多い。「老人自律型」は、65～69歳に多い。こうしてみると、ここで考察する老人意識類型は、加齢化とともに「老人否定型」・「老人自

表-6 老人意識類型の属性別構成 (東和町)

	老人自認型	老人自意識型	老人自律型	老人否定型
性別	女性	男性	男性	女性
年齢	75～79歳	80歳以上	65～69歳	60～64歳
家族類型別	単独世帯	単独、夫婦世帯	三世代家族	単独世帯
子供との同居別	同居	別居	同居	別居
出身地別	大島郡内	町内	集落内	県外
居住年数	40～50年	10～20年	20～30年	10～20年
学歴別	9年以内	9年以内	13年以上	12年以内
就労の有無	無職	無職	就労	無職
収入別	5～10万円	10～15万円	50万円以上	30～50万円

律型」→「老人自意識型」→「老人自認型」へと進む傾向をもつことが読み取れる。ただし、今回の場合、老人クラブを調査対象としたということで80歳以上の高齢者の方が75～79歳の人より比率が低かった。

表-6は、東和町の高齢者に関して性別、年齢別、家族類型別、同居別、出身地別、居住年数別、学歴別、住居形態、世帯収入別に老人意識類型を構成している主要な特性を抽出したものである。そこからここでの各類型を概観すると、「老人自認型」は、年齢は75～79歳の後期高齢層に多く、女性に多くみられる。このタイプは、世帯構成は単独世帯のものが多く、居住年数は40～50年、職業は「無職」のものが多く、学歴のうえでは低学歴層が多い。

これに対して「老人自意識型」は、男性に多くみられるものの、ただ年齢的には老人自認型よりやや年長の、80歳以上の後期高齢層に比較的多くみられる。世帯構成では単独世帯か夫婦世帯高齢者のる高齢者核家族世帯で住んでいる人が多かった。居住年数は、10年～20年未満で、職業に関しては、無職に多く、学歴は低学歴層で、収入は10～15万円の層に多かった。

第三の「老人自律型」は、男性に多くみられ、年齢としては65～69歳の世代に多い。世帯構成は三世帯世帯で住んでいる人が多い。職業はまだ持っており、出身地は地元の集落内出身で、住みだして20～30年未満の居住年数のもの、学歴は、高学歴に多かった。

最後の「老人否定型」は、女性に多く、年齢的には60～64歳の年代に一番多い。そして世帯構成は、単独世帯で住む人に多い。学歴は中学歴で、職業は無職、県外生まれで、居住歴10～20年の人、世帯収入は、30～50万円以上になるような層にみられる。

(3) 老人意識類型の基盤と心理的特性

まず、以上の4つの老人類型がどのような社会構造的性格をもつか分析してみたい。そのために親密な人間であるインフォーマル・グループと団体や集団への参加の数量から捉えてみたい。ここでのインフォーマル・グループとは、高齢者が親しくしている人であり、ここではインフォーマルな人間関係量と呼んでおく。それからフォーマル・グループの数をここではフォーマルな社会関係量と呼んでおきたい。インフォーマルな人間関係量については「総数」、「親類」、「近所」、「友人」の4つから捉えている。

表一7は、老人意識類型別に人間関係量と社会関係量を表示したものであるが、まず、全体を比較すると、東和町と橘町では違った人間関係と社会関係をしていることがわかる、東和町の人間関係量は、「総数」11.71個、「親類」4.87個、「近隣」3.59個、「友人」3.33個と、この人間関係量は、橘町に比べると全て少ない。逆にフォーマルな社会関係量は東和町では3.12個と、橘町の2.93個より多い。つまり、東和町の場合、橘町よりフォーマルな社会関係に依存している度合いが強いのである。以下では老人意識類型ごとにみてみたい。まず、東和町の高齢者の親しい人の「総数」では「老人自律型」が13.46個と、一番多く、次いで「老人否定型」が13.30個、「老人自認型」が12.18個、「老人自意識型」が8.68個となっている。これをさらに細かくみると、「親類」、つまり血縁関係の数では、「老人自認型」

が5.44個と一番多く、「老人自律型」(4.96個)、「老人否定型」(4.20個)とつづき、「老人自意識型」(3.39個)で一番少ない。他方「近所」、つまり地縁関係の数では、「老人否定型」が5.10個と一番多く、「老人自律型」(4.71個)、「老人自認型」(3.34個)、やはり「老人自意識型」(3.157個)において一番少ない。そして、「友人」、つまり友縁関係面では、「老人否定型」が4.00個と一番多く、以下「老人自律型」の3.79個、「老人自認型」の3.28個となり、「老人自意識型」となると、一挙に減少して2.25個となる。他方、団体や集団への参加数であるフォーマルな社会関係量の方でみると、今回の調査対象者である東和町の高齢者の社会関係量は、全体では3.12個となり、老人意識類型の中で「老人自律型」が3.67個と一番多いことがわかる。以下「老人自認型」が3.37個、「老人否定型」が2.80個、「老人自意識型」が2.67個となっている。つまり、「老人自意識型」が、フォーマルな社会関係量、インフォーマルな人間関係量の双方で、一番値が低く、それ

表-7 老人意識類型別にみた社会関係 (平均値)

		実数	インフォーマルな人間関係量				フォーマルな社会関係量	
			総数	親類	近隣	友人		
東和町	老人意識類型	全体	215	11.71	4.87	3.59	3.33	3.12
		老人自認型	103	12.18	5.44	3.46	3.28	3.37
		老人自意識型	34	8.68	3.39	3.15	3.24	2.67
		老人自律型	24	13.46	4.96	4.71	3.79	3.67
		老人否認型	10	13.30	4.20	5.10	4.00	2.80
橘町	老人意識類型	全体	187	13.21	5.07	4.00	4.01	2.93
		老人自認型	82	11.93	4.89	3.67	3.24	3.10
		老人自意識型	24	13.04	4.42	3.83	4.79	3.15
		老人自律型	27	18.04	5.35	6.19	6.04	2.38
		老人否認型	16	11.69	5.13	3.44	3.13	2.81

だけ社会関係を持っていないことを示している。この反対が老人否定型で、このタイプの場合、インフォーマルな人間関係量の総数が4類型中で突出しており、フォーマルな社会関係量においても4類型中で一番多い値を示す。これに対して「老人自律型」は、インフォーマルな人間関係量では近隣数と友人数が「老人否定型」に比べて少ないものの、それ以外の「親類」の数では一番多く人間関係量を持っている。それから「老人自律型」は、社会関係量において「老人否定型」に次いで積極的なネットワークを張っている。このタイプは、インフォーマル・グループの「総数」、親類、フォーマル・グループとも第2位の値を示している。「老人否定型」は、近隣関係と友人関係に比重を置いているタイプといえる。これに対して、「老人自認型」は、「老人自律型」について人間関係量もっている。「老人自認型」は、人間関係量では「親類」が5.44個、「近隣」が3.46個、「友人」が3.283個となっており、親類などの血縁関係を重視したネットワークをもっていることがわかる。

これに対して橘町の場合は、東和町と相当違ったパターンを示す。表からは親しい人の「総数」では「老人自律型」が18.04個と、一番多く、次いで「老人自意識型」が13.04、「老人自認型」が11.93個、「老人否定型」が11.69個となっている。「老人否定型」が人間関係量の面で一番数が少ないのである。これをさらに細かくみると、「親類」、つまり血縁関係の数では、「老人自律型」が5.35個と一番多く、「老人否定型」(5.13個)、「老人自認型」(5.07個)とつづき、「老人自意識型」(4.42個)で一番少ない。他方「近所」、つまり地縁関係の数では、「老人自律型」が6.19個と一番多く、「老人自意識型」(3.83個)、「老人自認型」(3.67個)、「老人否定型」(3.44個)において一番少ない。そして、「友人」、つまり友縁関係面では、老人自律型が6.04個と一番多く、以下「老人自意識型」の4.79個、「老人自認型」の3.24個となり、「老人否定型」となると、3.13個となる。他方、団体や集団への参加数であるフォーマルな社会関係量の方でみると、今回の調査対象者である橘町の高齢者の社会関係量は、全体では2.93個となり、老人意識

類型の中で「老人自意識型」が3.15個と一番多いことがわかる。以下「老人自認型」が3.10個と続く。以下「老人否定型」が2.81個、「老人自律型」が2.38個と、一番少なくなっている。

以上からみると東和町でみると「老人自意識型」が、フォーマルな社会関係量、インフォーマルな人間関係量の双方で、一番値が低く、それだけ社会関係を持っていないことを示している。この反対が「老人自律型」で、このタイプの場合、インフォーマルな人間関係量の総数が4類型中で突出しており、フォーマルな社会関係量においても4類型中で一番高い値を示す。

この老人意識類型の各類型の人間関係、社会関係は地域構造によって相違することを確認しなければならない。いずれにせよ、橘町では、「老人否定型」が人間関係・社会関係の双方の上で数値が少なく、その点で孤立パターンをとっているのに対して、東和町では、むしろ「老人自意識型」の方が社会関係において孤立パターンを示していることがわかるのである。

(4) 老後の開始、差別の認知・被害認知

老人意識類型の考察の最後に、限られたデータからこの老人意識類型が老後をどのように捉え、老人差別や自分自身に対する老人処遇の「いやな経験（被害感）」をするか簡単に触れておきたい。

まず、老後開始規定要因から以上の老人意識類型の特徴をみてみたい。⁹⁾表一八をみると、社会的地位の喪失を挙げているのは、老人自否定型が60.0%と、一番高く、ついで「老人自意識型」(47.1%)が高い。逆に「老人自律型」(33.3%)が一番低い比率になっている。バイオメディカルな地位の喪失を挙げているのは、「老人自認型」,「老人自律型」,「老人自意識型」,「老人否定型」の順で、一番少ないのが「老人否定型」となっている。家族的連帯の喪失を挙げているのは、「老人自律型」が37.5%と、一番比率が高い。以下、「老人自意識型」,「老人自認型」,「老人否定型」の順である。経済的自立の喪失を挙げているのは、老人自認型が一番高く、以下「老人自

表一 8 老人意識類型別にみた老後開始要因

		実数	社会的 地位の 喪失	バイオメ ディカル な地位の 喪失	家族的 連帯の 喪失	経済的 自立の 喪失	その他	不明
全 体		402	39.3	66.7	23.4	31.1	0.7	4.7
東 和 町	東和町全体	215	39.1	65.6	26.0	36.7	0.5	4.9
	老人自認型	103	40.8	68.9	20.4	43.7	1.0	1.9
	老人自意識型	34	47.1	61.8	23.5	35.3	—	8.8
	老人自律型	24	33.3	62.5	37.5	20.8	—	8.3
	老人否定型	10	60.0	50.0	20.0	40.0	—	—

$\chi^2=9.82$ $df=12$

意識型」, 「老人否定型」, 「老人自律型」の順となっている。

こうしてみると「老人否定型」が社会的地位の喪失でもって老後の開始を判断し, 「老人自律型」が家族的連帯の喪失でもって老後の開始を判断し, 「老人自認型」がバイオメディカルな地位の喪失と経済的連帯の喪失でもって老後の開始を判断する傾向をやや持っていることが分かるのである。

表一 9 は, 老人線意識, つまり老人とは何歳で始まるかという設問でも

9) ここでの老後開始規定の設問は, 「あなたにとって, 「老後」とは, どのような時を境にして始まるとお考えですか」というものであり, 使った回答肢は, 「1. 仕事をやめたり, 仕事を他の人に任せるようになったとき(退職)」, 「2. 年をとって, 家事を他の人に任せるようになったとき(主座を渡す)」, 「3. 年をとって身体がきかないと感ずるようになったとき(身体の不自由)」, 「4. または夫と死別したとき(配偶者の死)」, 「5. 子どもが結婚して独立したとき(子供の独立)」・「6. 年金が収入をささえるとき(年金生活の開始)」, 「7. その他」である。この内, 「退職」と「主座を渡すということ」を挙げたものをここでは「社会地位の喪失」と呼ぶ。以下「身体の不自由」を挙げたものを「バイオメディカルな地位の喪失」, 「配偶者の死」と「子供の独立」を「家族的連帯の喪失」・「年金生活の開始」を「経済的自立の喪失」と呼んでおきたい。拙稿「エイジングと社会」『いのちと環境』(山梨大学教養部総合コース講義録1993年第7号) 79—9頁

表-9 老人線意識別にみた老人意識類型

	東和町*						橘町**						
	合計	老人自認型	老人自意識型	老人自律型	老人否定型	不明	合計	老人自認型	老人自意識型	老人自律型	老人否定型	不明	
全体	215	47.9	15.8	11.2	4.7	20.5	全体	187	43.9	12.8	14.4	8.6	20.3
60歳以上	1	—	100	—	—	—	60歳以上	2	100	—	—	—	—
65歳以上	22	40.9	22.7	9.1	—	27.3	65歳以上	22	54.5	27.3	13.6	—	4.5
70歳以上	108	55.6	9.3	12.0	5.6	17.6	70歳以上	96	43.8	11.5	12.5	8.3	24.0
75歳以上	44	45.5	22.7	9.1	4.5	18.2	75歳以上	44	38.6	15.9	15.9	11.4	18.2
80歳以上	33	39.4	18.2	12.1	6.1	24.2	80歳以上	17	47.1	—	17.6	17.6	17.6
わからない	5	20.0	20.0	20.0	—	40.0	わからない	2	—	—	100		

(備考) * $\chi^2=14.43$ df=18, ** $\chi^2=20.27$ df=18

表-10 老人意識類型別にみた「老人排斥認知」と「いやな経験」

	実数	老人排斥認知*			いやな経験がある**			
		ある	ない	不明	ある	ない	不明	
全 体	402	23.4	66.1	10.2	19.4	78.6	2.0	
東 和 町	全体	215	27.9	61.4	10.7	17.2	80.5	2.3
	老人自認型	103	26.2	64.1	9.7	12.6	86.4	1.0
	老人自意識型	34	35.3	58.8	5.9	47.1	50.0	2.9
	老人自律型	24	25.0	70.8	4.2	4.2	95.8	—
	老人否定型	10	30.0	7.0	—	30.0	70.0	—
橘 町	全体	187	18.2	72.2	9.6	21.9	76.5	1.6
	老人自認型	82	19.5	70.7	9.8	20.7	79.3	—
	老人自意識型	24	20.8	62.5	16.7	62.5	37.5	—
	老人自律型	27	22.2	74.1	3.7	11.1	86.9	—
	老人否定型	16	12.5	84.3	6.3	12.5	87.5	—

(備考) 東和町* $\chi^2=1.27$ df=3, ** $\chi^2=30.94$ df=3, 橘町* $\chi^2=0.97$ df=3, ** $\chi^2=28.41$ df=3

って老人意識類型の所在をみたものである。これから明らかなことは、老人線を高い年齢に設定する人は、「老人否定型」、「老人自律型」に多くみられ、逆に「55歳以上」とか「60歳以上」といった低い年齢に老人線を設定する人は、「老人自認型」、「老人自意識型」に多くみられるということである。

次いで、老人差別の認知と「いやな経験」についてみておきたい。表10より、老人排除認知といやな経験ついてみてみよう。老人排除認知とは「現在の社会に老人を排除する仕組みが存在するか」どうかという内容の設問で、「ある」と答えたのは、東和町では全体では23.4%であり、橘町では18.2%であった。これからすると東和町の高齢者の方が老人排除認知を多くもっていることになる。

これを老人意識類型でみると、「老人自認型」が26.2%、「老人自意識型」が35.3%、「老人自律型」が25.0%、「老人否定型」が30.0%となっており、「老人自意識型」と「老人否定型」に老人排除の認知度が高いことがわかる。他方、橘町でみると東和町ほど顕著な差はみられないが、「老人自律型」(22.2%)や「老人自意識型」で僅かだけ老人排除の認知度が高いことがわかる。

これをさらに、老人扱いされて「いやな思いをした」という被害経験でみると、4類型ではいやな経験が「ある」と答えたのは、東和町の「老人自意識型」で47.1%もみられ、「老人否定型」が次いで多く、30.0%となっている。「老人自認型」(12.6%)、「老人自律型」(4.2%)との差はかなりみられる。同様に、橘町についてみても、「老人自意識型」が62.5%と、突出した値を示している。「老人自認型」が「いやな思いをした」比率は、20.7%である。以下「老人否定型」が12.5%、「老人自律型」が11.1%となっている。橘町では「老人自意識型」と「老人自律型」との間に顕著な差がみられるのである。

東和町と橘町の老人意識類型別でみると、老人排除の認知に関しては違った特徴を持っていることがわかったが、「いやな思いをした」というレベ

ルでは、両地域とも老人意識類型は、同じパターンを示している。

4. 老人意識類型と自我構造

今回、調査した東和町の高齢者の自我意識は、超高齢社会に住む高齢者ということで独自の性格を持っているのであろうか。表-11は、地域別に高齢者の自我像の相関関係を求めたものである。自我像は、生きがい感、生活満足度、孤独ではない、家族に誇りをもつ、自己存在満足度、自己能力発揮度、社会的不可欠性、社会的貢献能力の8つの項目で調べてみた。

表-11 自我像要因の相関マトリックス

		生活要因		家族要因		自己要因		社会要因	
		生きがい感	生活満足度	孤独ではない	家族に誇りを持つ	自己存在満足度	自己能力発揮度	社会的不可欠性	社会的貢献能力
東和町	生きがい感	1.0000							
	生活満足度	0.5959**	1.0000						
	孤独ではない	0.4763**	0.5238**	1.0000					
	家族に誇り	0.4459**	0.6097**	0.5182**	1.0000				
	自己存在満足度	0.2395**	0.3473**	0.3660**	0.5889**	1.0000			
	自己能力発揮度	0.3986**	0.4610**	0.4673**	0.5373**	0.5064**	1.0000		
	社会的不可欠性	0.3047**	0.2636**	0.3573**	0.3146**	0.2806**	0.4833**	1.0000	
	社会的貢献能力	0.3613**	0.2674**	0.3532**	0.3213**	0.2812**	0.4070**	0.6283**	1.0000
	平均値 ¹⁾	0.4032	0.4384	0.4374	0.4766	0.3729	0.4659	0.3761	0.3742
橘町	生きがい感	1.0000							
	生活満足度	0.5553**	1.0000						
	孤独ではない	0.4063**	0.3803**	1.0000					
	家族に誇り	0.5444**	0.5720**	0.4180**	1.0000				
	自己存在満足度	0.4506**	0.3655**	0.4455**	0.4543**	1.0000			
	自己能力発揮度	0.4302**	0.4709**	0.2262**	0.5628**	0.4361**	1.0000		
	社会的不可欠性	0.3494**	0.2621**	0.2123*	0.3848**	0.3397**	0.4191**	1.0000	
	社会的貢献能力	0.2294**	0.2447**	0.1864*	0.2955**	0.3479**	0.3923**	0.6793**	1.0000
	平均値	0.4236	0.4073	0.3250	0.4656	0.4057	0.4197	0.3781	0.3394

(備考) 数値は相関係数で、(**)は1%で有意(*)印は5%で有意を示す。1)平均値は、各相関する7項目との間の相関係数の平均値を表す。

そこで、橋町と比べながら東和町の高齢者の自我像の特性を探ってみたい。東和町の高齢者の自我像項目の中で、相関係数が0.6以上を示すのは、「社会的不可欠性」と「社会的貢献能力」(0.6283)の間、「生活満足度」と「家族に誇り」(0.6097)との間の2つのセルにおいてである。次いで、0.5以上を示すのは、「生きがい感」と「生活満足度」, 「孤独ではない」と「生活満足度」, 「孤独ではない」と「家族に誇り」, 「自己存在満足度」と「家族に誇り」, 「自己能力発揮度」と「家族に誇り」, 「自己存在満足度」と「自己能力発揮度」の間の6セルにおいてである。いま全体の平均値を求めると、総計28のセルの平均値が0.34181であるから、0.5や0.4以上の値は、この東和町での自我像要因間では高い相関を示すと考えていいであろう。逆に「社会的貢献能力」と「生活満足度」, 「社会的貢献能力」, 「自己存在満足度」と「社会的不可欠性」, そして「自己存在満足度」と「社会的貢献能力」, 「自己存在満足度」と「生きがい感」との間では、0.2台の相関係数に留まり、「自己存在満足度」という項目群で自我像の値が低い値を示している。次いで、家族要因と自己要因の間で、生活満足度と社会的不可欠性・社会的貢献能力の間で0.3台の相関係数がみられ、このような要因の間で低いことが分かる。

8つの要因の平均値を求めてみると、東和町では「家族に誇り」の平均値が一番高く、以下「自己能力発揮度」, 「生活満足度」, 「孤独ではない」, 「生きがい感」, 「社会的不可欠性」, 「社会的貢献能力」, 「自己存在満足度」の順となっている。つまり、「家族に誇り」が自己像の中では一番中心的な位置を占め、それに対して「自己存在満足度」という項目が一番作用していなかったのである。言い換えれば、「家族に誇り」を中心として「生活満足度」, 「自己存在満足度」, 「自己能力発揮度」, 「孤独ではない」が結びつき、以下生活要因や社会要因などが関連している構造となっている。それは生活要因を起点として「家族要因→自己要因→生活要因→社会要因」という形の関連で結びついている。その点では、東和町の高齢者の自己像では、社会要因に問題を秘めていることが分かるのである。

それに対して橋町の自我像はどうかといえは、8項目相互間の総計セルの平均値は0.36787という値であって、東和町に比べると、低くなっている。実際、0.6以上の相関係数は「社会的不可欠性」と「社会的貢献能力」の間であって、0.5以上の相関係数も「生きがい感」と「生活満足度」との間、「家族に誇り」と「生きがい感」との間、「生活満足度」と「家族に誇り」との間、「家族に誇り」と「自己能力発揮度」との間の4つのセルだけである。逆に、「孤独ではない」と「社会的貢献能力」との間では0.1位の相関係数しかみられない。ここでも8要因の要因間のネットワークを平均化した値でみると、「家族に誇り」の値がもっとも高く、以下「生きがい感」、「自己の能力発揮度」、「生活満足度」、「自己存在満足度」、「社会的不可欠性」、「社会的貢献能力」、「孤独ではない」の順になっている。橋町では「家族に誇り」と「社会的不可欠性」と「社会的貢献能力」の位置は、東和町と変化ないが、「生活満足度」が4位に、「孤独ではない」が8位、「自己能力発揮度」が3位に落ち、逆に「生きがい感」が2位に、「自己存在満足度」が5位へ上昇している。確かに両地域の平均値を比較すると、8項目のうち5つまでは東和町が相関係数について大きい値を示しているが、生活要因の「生きがい感」と自己要因の「自己存在満足度」、社会要因の「社会的不可欠性」の3つが、橋町の方が大きくなっている。つまり、橋町では自我像として「生活要因」と「自己要因」と「社会要因」の一部が東和町に比べて強かったことを物語るのである。それからすると、超高齢化社会の東和町では、「家族要因」が自己像に強く働いているということができよう。そのことが、先に触れた東和町で家族員と世帯収入などが老人自己成就意識に結びついている理由でもある。

この老人意識類型は、いまみた自我像とどのように結びついているのであろうか、つまり、各老人意識類型と自我像との連関をみておきたい。表—12は、老人の自我意識を老人意識類型の各タイプとの関連でみたものである。さきにわれわれは、老人自意識型の社会関係量を問題にしたが、自我構造では意識構造はどのようになっているのだろうか。表をみると、「老

表-12 老人意識類型別にみた自我像

		生きがい感	生活満足度	孤独ではない	家族に誇りを持つ	自己存在満足度	能力発揮度	社会的不可欠性	社会的貢献能力	合計
合計		74.1	76.4	68.5	68.0	64.0	45.3	28.1	32.5	456.9
東和町	全体	72.6	75.8	68.4	65.6	62.8	44.2	25.6	27.4	442.4
	老人自認型	76.7	80.6	73.8	69.9	69.9	49.5	25.2	28.2	473.8
	老人自意識型	58.8	79.4	58.8	52.9	61.8	32.4	20.6	20.6	385.3
	老人自律型	95.8	91.7	83.3	83.3	70.8	58.3	33.3	37.5	554.0
	老人否定型	80.0	60.0	70.0	80.0	60.0	50.0	40.0	40.0	480.0
橘町	全体	77.5	78.6	70.1	72.2	66.8	47.6	31.6	39.0	483.4
	老人自認型	73.2	75.6	69.5	64.6	64.6	42.7	29.3	41.5	461.0
	老人自意識型	70.8	70.8	70.8	75.0	70.8	45.8	25.0	37.5	466.5
	老人自律型	92.6	85.2	74.1	77.8	77.8	59.3	27.0	44.4	538.2
	老人否定型	93.8	93.8	87.5	87.5	75.0	75.0	56.3	62.5	631.4

「老人自意識型」では、生きがい感、生活満足度、自己存在満足度、孤独ではない、家族に誇り、自分の能力発揮度、社会的不可欠性、社会的貢献能力の8要因においていずれも比率が最下位の値を示していた。つまり、「老人自意識型」は、自己要因、社会要因、家族要因、生活要因いずれとも最下位の値となっている。つまり、この「老人自意識型」の場合、自我像全体で数値が一番低くなっている。なかでも社会的不可欠性と社会的貢献能力が20.6%というのは、特筆してよいであろう。

これに対して「老人自律型」は、生きがい感、生活満足度、自己存在満足度、孤独ではない、家族に誇り、自分の能力発揮度の6要因で一番高い値を示している。

老人否定型は、「社会要因」である社会的不可欠性と社会的貢献能力の比率に関して一番高い値を示している。生活満足度、孤独ではない、家族に誇りという項目以外は、「老人自律型」に次いで肯定的な比率が高い。つまり、このタイプは、自己存在に満足度を示したり、自分の能力発揮度も高いことから、4つのタイプ中で個人主義のタイプと考えられる。

最後に、「老人自認型」の場合は、生活満足度、孤独ではない、自己存在満足度の項目が「老人自律型」に次いで2位の値を示し、残りの5項目は、「老人自意識型」ほど低くないものの、4類型中では第3位の値となっている。このタイプの場合、家庭生活の安定が生活満足度となっているが、自分の持つ自己能力発揮度や社会的不可欠性、社会的貢献能力が、なかでも社会的不可欠性の項目が低いことが特徴となっている。

以上から「老人意識類型」を自我像に引きつけて解釈すると、超高齢社会の東和町では老人自律型が突出した形で、自我像の安定化を来しているタイプとなっていることがわかる。「老人否定型」も、次いで安定しているタイプである。反対に「老人自意識型」は、極端に低くなっており、老人意識を自我像の中からも形成していることが分かる。それと比べれば「老人自認型」は、老人意識がやや安定している。ただし、橘町調査では「老人自認型」が「老人自意識型」よりも低くなっているため、常に「老人自意識型」が自我像の一番低位置を占めているわけではないことは留意しなければならない。

東和町で問題となる老人意識類型は、「老人自意識型」であるが、このタイプの場合、本人自身が「老い」に対して積極的姿勢を示したり、自己の能力への積極的価値づけをせず、かえって無能性、消極性、非社会性という価値を内面化した結果、この意識を形成していると解釈できるであろう。

5. 結語

本稿では、高齢化の進んだ過疎の島において「老人」とはどのようにみられているのであろうかという問題意識から、老人自己成就意識の分析、老人意識類型からみた各類型の特徴の分析、それらの類型の自我像項目の分析などを行った。

- (1)東和町では、老人自己成就意識の形成に関して年齢と世帯収入が比較的強く働いていた。

(2)性別属性は伝統的な地域に比べて、東和町ではまだ根強く働いている。

(3)女性において老人自己成就意識形成が、他地域に比べて早めに始まるのは、有職性と学歴を媒介してである。

(4)また、概して大半の男性より大半の女性がこの意識を早く持つに至るのも有職性と学歴と関連している。

以上である。それから、ここでは、「老人否定型」、「老人自律型」、「老人自意識型」、「老人自認型」という4種類の老人意識類型を構成したが、この4類型には、加齢化とともに「老人否定型」・「老人自律型」→「老人自意識型」→「老人自認型」へと進む傾向があることが分かった。そのうち「老人自律型」が積極的な性格を一番持っており、彼らは自己像の生活要因、家族要因、自己要因、社会要因のすべてにおいて高い数値を示し、この4類型の中では一番老人化を拒絶する類型となっていた。これに対して「老人自意識型」が人間関係や社会関係を失っており、差別認知や被害認知に関しても一番強い層をなしていた。それからこの「老人自意識型」が女性に多く、しかも無能性や有職性や孤立と関連していることを鑑みると、性差別が深層部分で作用していることも考慮に入れなければならない。

東和町のような超高齢社会では、「老い」をより一層意識させ、「老い」への消極的な反応が比較的目につくのである。

<参考文献>

- (1)宮本常一『東和町誌』（東和町）昭和57年
- (2)東和町『とうわ：広報 縮刷版』
- (3)橘町『橘町史』昭和58年
- (4)『高齢者の社会心理学的研究：山口県東和町』（厚生科学研究費補助金：代表 日本社会事業大学 前田大作）平成6年3月
- (5)榎並悦子『日本一の長寿郷：山口県東和町』（大月書店）1995年
- (6)I. Rosow, Socialization to Old Age, 1974 (University of California Press), 嵯峨座晴夫監訳『高齢者の社会学』1983（早稲田大学出版）

- (7) Erdman B. Palmore., 1990, AGEISM: Negative and Positive, (Springer Publishing company) 奥山正司他訳『エイジズム』(法政大学出版局) 1995年
- (8) Howard P. Chudacoff, 1989, How Old Are You? Age Consciousness in American Culture, (Princeton University Press) 『年齢意識の社会学』(法政大学出版局) 1994年
- (9) L. K. Gerge., Role Transitions in Later Life. (Wadsworth. Inc) 1980, 西下彰俊・山本孝史「老後」(思索社) A. Gubrium and K. Charmaz., Aging, Self, and Community, (JAIPRESSINC.) 1992
- (10) 井上俊「老いのイメージ」『老いの発見2』1986 (岩波書店)
- (11) 片多順『老人と文化—発年人類学入門』(日本の中高年7) 昭和56年(垣内出版)
- (12) Sharon. R. Kaufman., The Ageless Self-Sources of Meaning in Later Life, (The University of Wisconsin Press), 1986, 幾島幸子訳『エイジレス・セルフ』(筑摩書房)
- (13) A. R. Lindesmith, A. L. Strauss, & N. K. Denzin., Social Psychology (5th ed), 1978, 船津衛『社会心理学』(恒星社厚生閣) 1981年
- (14) 宮田登・中村桂子『老いと「生い」』(藤原書店) 1993年164頁
- (15) Nancy J. Osgood., 1992, SUICIDE IN LATER LIFE, (Lexington Books), 野坂秀雄訳『老人と自殺』(春秋社) 1994年